Special Interview

この人に聞く

多くの方のご協力を得て今年「聖徳太子 1400 年御遠忌」を無事開催することができました。

地球環境が持続することができなければ太子の「和」の教えを今に活かすこともできません。今後は SDGs などへの取組も大切だと考えております。

聖徳宗管長
法隆寺第百三十世住職
古谷正覚 師

2021 年 11 月 4 日、法隆寺・寺務所にてインタビュー

▶「1400 年御遠忌」という大きな節目の年

── 今年は聖徳太子が薨去されて 1400 年の「聖徳太子 1400 年御遠忌」という大きな節目の年とのことです。どのような 1 年でしたか。

この 1 年は本当に慌ただしい年でした。4 月 3 日から 5 日にかけて開催した御遠忌の準備に並行して、1400 年の節目の年なので展覧会などいろいろな行事があってそれらの準備もしなければなりませんでしたし、収蔵品の貸し出しなどもありました。私どもの寺は僧侶が 13 名で、そのうち雑務などに実際に動ける僧侶は 7、8 名しかおりませんので、いろんなことをやらなければならないものですから。

── こんなに大きなお寺をその人数で運営するのは大変ですね。

今もまだ忙しくしていまして、バタバタと終わりそうな年だなという気がしております。

── 聖徳太子といえば日本人なら誰もが知っている偉人ですが、やはり 100 年ごとの節目の年ということで、改めて聖徳太子や法隆寺に注目が集まったのではないでしょうか。

そうですね。法隆寺は聖徳太子の教えを守り伝える「聖徳宗」の総本山でもあり、毎年 3 月 22 日から 24 日にかけて開催する「お会式」で聖徳太子の遺徳をしのんでおまつりするというのが我々の一番大事な仕事です。それの 100 年に一度という非常に重要な年にちょうど私が巡り合ったということで、なんとかがんばってやらないといけないという思いでしたね。

100 年に一度ということでテレビや新聞などを含め各方面からいろいろご注目していただいて、改めて皆様方に聖徳太子のことを知っていただけて本当にありがたいことだと思っております。

── その 100 年に一度のタイミングで御遠忌を

取り仕切る第百三十世住職として2020年10月にご就任されたわけですけれども、先代住職の大野玄妙（げんみょう）管長が2019年10月にお亡くなりになられたのはまったく予想もしないことだったと思います。

はい。もちろん全く予期せぬ衝撃でした。ご本人も亡くなられる1か月ほど前までは元気に働いておられたんです。それがちょっとしんどいわといって入院されて、1か月ちょっとでご病気で亡くなられてしまいました。ご本人もそんなことは夢にも思っておられなかったと思うんですね。本当に残念なことでした。

── 大野前管長が法隆寺で9歳で得度された際、古谷ご住職も一つ年下で一緒に得度されたそうですね。

あの頃はまだおおらかな時代で、境内で野球というかソフトボールみたいなことをバットを振り回して一緒に遊んでおりました（笑）。

── 子供の時分からずっと共に過ごして来られて、先代がご住職になられてからは、古谷様は執事長としてお支えになられていたんですよね。

そうなんです。ですから先代のご不幸の際は本当に「えっ？」という思いでした。

── とりあえずは代表役員代務者になられて、まずは後を引き継がねばということでしたか。

2019年の暮れですから、もう2021年の聖徳太子1400年御遠忌が差し迫っていると。何をおいてもまずはそれを成功させるのが一番大事なこと、受け継いでやらなければならないことだと思っておりました。

ですので、まず他のことは何も考えずに夢中で準備に取り組み始めたんですけれども、そうこうしている間に新型コロナウイルスが発生したわけです。だんだん感染が拡大してくるし、どうなるんやろうと思っていました。ですが御遠忌は2021年4月3日からというのは決めておりました。4月3日というのが旧暦の2月22日、聖徳太子の御命日に当たる日ですのでね。その頃は世間では第4波ということで感染者数が増加傾向にありましたので、そういう中でもなんとか成功させたいという思いでやっておりました。

お迎えする来賓の方々や行列なども、極力人数を減らして、席も間隔を空けて、検温や消毒用アルコールの準備など、できる対策はすべてやりました。皆さん方にもご協力とご理解をいただいて、法要を無事終了することができました。

2021年4月3日～5日に開催された「聖徳太子1400年御遠忌」の様子

▶今につながる聖徳太子の教えやお取組

── 法隆寺は聖徳宗総本山で太子の教えを守り伝えるお寺だとおっしゃいましたが、やはり太子の教えは今の世の中にも通じるものですか。

聖徳太子がおられた時代というのは、朝鮮半島の外交問題や国内の政治などで争いなどの絶えない時代でした。聖徳太子はそういう状況の中でなんとか平和な世の中を作りたいという思いがまず第一にあって、その平和の実現のために仏教を取り入れ広めようと考えられたと思います。

593年に太子の叔母の推古天皇が即位された際に太子は摂政となられて、その翌年には太子が進

言して「三宝興隆の詔」が発せられました。太子は仏教というものを国の教えとして国造りの基本に取り入れられたわけです。そして寺を沢山作ることによって、点が面につながるようにして仏教を広めていこうと考えられました。

それに伴って、役人の心得として「十七条憲法」を作られたのです。その最も重要な第一条に有名な「和を以て貴しと為す」がありますが、やはりこの「和」が、太子の教えの根幹となる大事な言葉でしょうね。

人間として生きていく以上は、お互いに協調し合い、和んで、お互いに信頼して相手の心を察するというようなことが必ず大事になってくると思うんです。我々としては、太子が広めようとなさった仏教と、十七条憲法の一番最初に書かれている和の心というのを大事にしないといけないと常々思っております。

── 当時隣に随という大国があって、そこと付き合っていくために国の形を整えねばというお考えも太子にはおありだったんでしょうか。

日本の記録にはありませんが、607年の小野妹子の遣隋使派遣の前の600年に使者が隋に派遣されているんですけれども、その時、隋の皇帝ははるばるやってきた倭国の使者に、政治や風俗に道理がないから改めるよう告げたそうです。要するに日本には規律も何もないと相手にされなかったと。その報告を受けた聖徳太子は603年に冠位十二階、604年に十七条憲法を作り、冠位や規律のある国だと形を整え、607年に小野妹子が遣隋使として隋に有名な国書を持っていったわけです。

── やはりそういう外交のことも考慮しておられたんですね。当時推古天皇の宮殿があった飛鳥ではなくこの斑鳩の地に法隆寺を作られたのも、海外への意識があったのかもしれないですね。

まず日本の国威を見せねばならないということで、外国の使者が到着する大阪の難波に四天王寺という立派なお寺を作られました。当時は大和川を上って宮殿のある飛鳥へ移動したので、その途中で法隆寺が見えてくるというようなことも考えられたのではないかと思います。この場所は当時の交通の要というような意味もきっとあったのでしょう。

▶様々なものに大きな影響を及ぼされた太子

── 聖徳太子という方は、やや伝説的な部分もあるのかもしれませんが、なさった事績としてはそれこそ今の日本の国の形の基礎を作ったような大きい仕事をいくつもされていますね。実際、親鸞聖人などいろんな宗派の方が聖徳太子を崇めておられます。こういう太子のような方は日本の歴史上他にはあまりおられないですよね。

親鸞聖人は太子のことを「和国の教主聖徳王」と呼んで尊敬されているんですけれども、簡単に言えば「日本のお釈迦さん」というような意味で、要するに日本へ仏教を取り入れられた方として崇めておられるんです。

奈良時代に行信僧都という方が聖徳太子を偲んで、太子のお住まいの斑鳩宮があった場所に夢殿を作られました。これが太子信仰のはじまりではないかとされていますが、平安時代には太子の伝記や肖像などが次々と作られました。鎌倉時代には先ほどの親鸞聖人の和讃（諸仏・菩薩・高僧の徳や行跡を讃えた歌謡）などもあり、太子は観音様の化身だというような伝説も出てきて、太子信仰も絶頂期になるわけです。

室町時代以降には、太子が大きい寺の建立に数多く関わられたという縁から、大工や左官など寺社建築に関わる方々が始祖として太子を祭るようになり、これが今も全国各地に残る「太子講」の始まりです。例えば新潟県妙高市には妙高高原や杉野沢というところに太子堂があって今でも太子講を行っておられるんですが、法隆寺の宝物の保存に尽力してくださった岡倉天心さんがこの妙高で亡くなられたご縁で、今も毎年法隆寺の僧侶が法要にうかがっています。ただここは大工さんではなしに、時代が変わって今は商工会が運営され

ているんですが（笑）。他にも石材の組合さんで太子講をやっておられるようなところもあります。

── 今でも受け継がれているのは驚きです。

芸能も聖徳太子が広められた開祖だというふうに言われているんですよ。当時百済から帰化した味摩之（みまし）という方がおられまして、この方が伎楽を日本に伝えたとされています。仏教行事で伎楽・舞楽が行われ、以後いろんな芸能に変わっていったんでしょうけれども、聖徳太子が子供たちに伎楽を習わせたのが最初だと言われておりまして、そういう経緯から、日本の芸能の開祖だということが言われているんでしょうね。

── こうしてお話を伺えば伺うほど、太子は仏教だけでなく様々なものに大きな影響を及ぼされた方なんだなと感じます。

技術の面もありますし、文化の面もありますし、芸術の面もありますし、いろんなことの開祖、始祖ということで崇められているわけです。

▶仏門に入られた経緯と受け継ぐ歴史の重み

── ところで、古谷ご住職が仏門に入られたきっかけは何だったんですか。

父親が元々法隆寺の僧侶だったんです。戦争に招集されて一度還俗して入隊し、終戦後もしばらくは寺に戻らず紆余曲折はあったんですが、金堂焼損後の修理完成の落慶法要が 1954 年にありそれを手伝うために寺に戻りました。私もそれからずっとこの寺で暮らして 1957 年に 8 歳で得度し、父親の後を継いで僧侶になったわけでして、なにか強い思いがあって仏門に入ったわけではないんです。

── 人間はやはり育った環境の影響が大きいと言いますからね。

まさにもう父親の後を継いで、小学生のころからお参りや法隆寺の行事にいろいろ参加してきたわけですからね。子供の頃はお堂へ入って眠たかったら寝ていたと思いますよ（笑）。そんな子供時代からずっとやっていますので、いろんな行事に戸惑いということはありません。何も考えることもなく素直に自然体でできました。

── でも誰かがやらないといけない仕事ですし、使命のようなものですよね。どこに生まれるかのめぐり合わせといいますか。

まさにそうなんです。

── 古谷ご住職で第百三十世になられるというくらい法隆寺には長い歴史がありますが、その重みというようなものは感じられますか。

それはそうですね。今まで長く続いてきたものをいかに次の方に伝えるか、何のトラブルもなく伝えるかというのがやはり私の大切な仕事だと思っております。この寺では聖徳太子の教えを今までずっと受け継いできていますので、それを次の世代に受け継ぐ。間違った解釈をしないで正しく受け継げればと考えております。

── 建物や仏像、数多くの寺宝といった「もの」は当然大事にしながら、「精神」の面、教えの面も大事に伝えていくという、我々には想像もつかないような重責を担っておられるわけですね。

真剣に考えれば大きなプレッシャー、重責ということなんでしょうけれども、常に無我夢中で一心不乱に、目の前にあることを一生懸命やっているという感じですね。

法隆寺大講堂「薬師三尊像」（平安時代・国宝）

▶法隆寺で感じたことが何かのきっかけになれば

── いろんな建物や宝をお持ちですので、維持していくのにお金がかかられると思います。それ

らは基本は拝観料で賄っておられるんですか。

そうです。

── それだけでは結構厳しくないですか。

厳しいですよ。我々の寺は修学旅行の生徒さんの集団拝観が多いですので、今後少子化が進むと収入面も下がってくるでしょう。一方で修理維持費のほうは上がってくるでしょうから、将来のことを考えて今流行りのクラウドファンディングなどにも取り組んでおります。焼損した金堂壁画の一般公開に向けた調査研究の費用や必要な計測機器・展示機材などの購入のためにご支援をお願いしまして、収蔵庫で壁画を見学していただけるリターンをご用意したところ、無事目標額に達しました。今後もこうした取組を色々と工夫していかなければならないなと思っております。

── 人々にできるだけ現地に来て法隆寺を見ていただいて、何かを感じていただくことが望ましいですね。

観光で来ていただいた方にも、心に何か残していただけたらというのはやはり思いますのでね。とにかく皆様にここ法隆寺まで足を向けていただけなければ何もすることができない、訴えることもできない。けれどもお越しいただければ何かを感じていただくことも可能です。

我々が思いますのは、仏様と対面して、仏様から出される光を感じていただきたい。これがまさに観光です。観光という言葉は、光を観る、感じるということなんです。その土地が出している光というのか、そういうものも感じていただくという、まさにその土地その土地の雰囲気を体で観ていただくというのが観光だと思うんです。何も感じなかったら観光ではありません。

── そうして感じた何かがいつかひょっとしたら時間が経って自分の中で何かにつながると。

そうそう。小さな芽が膨らんでくる可能性もありますからね。

── 私も先日何年振りかで個人的に法隆寺を拝観させていただいたんですが、建物だけでなく膨大な数の寺宝も含め、こんなにも沢山見どころがあるお寺なんだと改めて驚きました。

あまりにもありすぎて、すべて印象に残るわけではないかもしれませんね。それでもやはりまた訪れていただきたいですし、次回は目標を決めて来ていただければとも思いますね。

── 修学旅行で来たとき分からなくても、大人になってからまた来たらちょっと違う感じ方もあるかもしれませんね。

何かを感じるきっかけになれば本当にありがたいことだと思います。あとは、仏様などはやはり信仰の対象ですからね。もちろん美術の面から興味を持っていただいてもいいんですが、できれば信仰の面にも興味を持っていただければとも思います。いずれにせよ法隆寺というものをしっかり知ってもらうきっかけになればという思いがありますね。

▶奈良の観光や交通についてのお考え

── 奈良の経済や観光に関してはどのようにお考えですか。

奈良県にはそう大きい企業さんがあるわけでもないので、知事さんは観光に力を入れていただいていますが、それは我々も非常にありがたいと思っております。2019 年にはパリやロンドンに法隆寺の仏像を持って行っていただきました。これは多分東京オリンピックのときに奈良へ来てもらお

うという狙いだったと思うんですけれども、コロナでそれがなくなったのは残念でした。

そして観光に伴って食事ですね。大和牛、大和肉鶏、大和野菜など、最近食のブランドを大事にされるようになってきたと思うので、その辺を使ってもう少し奈良らしい名物料理ができればいいなと思っております。法隆寺近辺でも残念ながら名物料理というのがあまりないんですよね。「三輪の素麺」といったように土地から連想されるような名物料理が沢山あればいいなと思います。

── 交通に関してですが、例えば東大寺周辺に観光に来た人が斑鳩周辺に周遊する流れというのがあまりうまくできていないようですね。

交通は課題だと思います。法隆寺の前の国道25号線もとても混みますし、バイパスも工事があまり進んでいないようです。やはり移動に時間がかかるということが奈良の観光の一つのネックですね。バスもコロナ禍の影響でしょうけども本数が減っていますし。奈良はマイカーで来られる方が多いですので、各スポットへ行くにしてもやはり道路が大事です。道路をもう少しなんとかしてもらえれば、もっと人の動きがスムーズで盛んになるのではないかと思います。現状では特に中南和へは観光客が足を運びにくいですね。

県として観光に力を入れていただいているのは本当にありがたいですので、あとは移動するための道がどうにかなればという思いです。

「1400年御遠忌」を執り行われる古谷ご住職（中央）

▶SDGsや地球環境の未来への思い

── 新型コロナの問題もそうですが、最近の世の中についてはどのようにお考えですか。

将来のことを考えると、新型コロナ以外にも地球環境やCO_2問題などいろんな問題が気になります。今は大丈夫でも将来どうなるかがよく分からない。今SDGs（持続可能な開発目標）が注目されていますが、われわれもそういう枠組みの中でできることがないだろうかとも思います。

いろんな人がSDGsの17のゴールについて議論されていますが、まさに聖徳太子のおっしゃった「和」、話し合いによって今後の世界の進み方がある程度決まってくるんだと思うんですけれども、そういう太子の心が、地球の未来のために何かの一助になればというような思いもあります。

── 「SDGsの項目を十七条憲法ですでに太子は実践されていた」とか、「現代に通じる太子の教え」といった切り口の記事も最近目にしますね。

そうなんですか、それは知りませんでした。

── てっきりご住職はそういう記事をお読みになっておっしゃっているのかと思いました（笑）。

本当に全然知りませんでした（笑）。十七条憲法とSDGsの17のゴールで数が一緒だなとは思っていましたけれけども、憲法と結び付くとは思いませんでした。ただこれから環境にせよCO_2にせよいろんな大事なことを決めていくには話し合いが大切ですし、そうした話し合いで意見を合わせるにはやはり和の心が大事で、太子の教えに通ずるものがあると常々思っておりました。

── 例えばある記事では、十七条憲法第一条の有名な「和を以て貴しと為す」は、SDGsのゴール17番「パートナーシップで目標を達成しよう」につながるとか、第十条の「忿（いかり）を絶ち瞋（いかり）を棄て、人の違（たが）うを怒（いか）らざれ」（心の怒りを絶ち、憤りの表情を棄て、他の人が自分と違うからといって怒らないようにせよ）は、ゴール5番「ジェンダー平等を実現しよう」につながる多様性の受容を訴えたものだといった指摘がされていました。

なるほど、うまいこと考えはるなあ（笑）。新型コロナも大変な問題ですがいずれある程度は収まってくるでしょう。ただ世界的に考えて、地球環境が持続することができなかったら太子の「和」という話どころではなくなってしまうので、やはりSDGsに向けて何かしなければならないのではないかと考えています。

── でもどちらも17項目だというのはただの偶然ではないような気もしてしまいますね。

私もある会合の場でSDGsはゴールが17個あるから十七条憲法ですねという話はしたんですけれど、結び付きまではないかなと思ってそれ以上は突っ込まなかったんです。

── SDGsと結び付けて一度お話ししていただいてはいかがでしょうか。

いやいや、まだそこまでは研究ができておりませんのでもう少し勉強します（笑）。

「1400年御遠忌」の様子

（聞き手・文責：吉村謙一）

●プロフィール　古谷　正覚　師

■主な経歴

1948年大阪市生まれ。1957年法隆寺にて得度。1971年龍谷大学文学部卒業。1974年高野山大学大学院修士課程中退。1999年聖徳宗宗務所長・法隆寺執事長就任。

2020年、法隆寺代表役員代務者就任。同年10月聖徳宗管長・法隆寺第百三十世住職就任。

■座右の銘、好きな言葉

「以和為貴」（和を以て貴しとなす）。聖徳太子が制定された十七条憲法の第一条。

■趣味

音楽鑑賞（1960年代のオールドジャズが好きですが、クラシックなども含め何でも聴きます）、旅行（新型コロナの影響で全然行けていませんが、ストレス発散や気分転換に静かな温泉に行ったりするのが好きです）

■好きな食べ物

何でも食べます。

■奈良県内で好きな場所

西院伽藍北西の小高い場所に建つ「法隆寺西円堂」から見える景色

■聖徳宗総本山 法隆寺の概要

推古15年（607年）、聖徳太子により創建された。太子は中国の優れた政治や文化、とりわけ仏教を積極的に取り入れ、法隆寺以外にも四天王寺、中宮寺、広隆寺などの寺々を建立し、冠位十二階や憲法十七条の制定、遣隋使の派遣などによって国の発展を図られた。

8世紀初頭に法隆寺の現伽藍が完成したと考えられるが、兵火や天災にはあわず、太子を慕う人々の「太子信仰」に守られたこともあって、現存する世界最古の木造建築群として往時の姿を今に伝えている。

境内は西院と東院に大きく分かれ、国宝・重要文化財の建築物だけでも55棟に及ぶ。また、建造物以外にも優れた仏教美術品を多数所蔵しており、その数は国宝だけで38件・150点、重要文化財を含めると約3000点にもなる。

1993年にわが国初のユネスコ世界文化遺産として、「法隆寺地域の仏教建造物」（法隆寺・法起寺）が姫路城と同時に登録された。